



里見八犬傳 拾四編 卷世上



十に編みたるは

三十一

松野 晴春院

南總里見八犬傳第九輯卷之三十一

東都 曲亭主人編次

第百五十四回 照文二書を捧て東藩小還る

再説一休和尚名宗純紫野大徳寺の宗曇花叟の嗣法也。出藍の才弥高く。禪機悟法長し。よの世の誌あるのあそむ。人の知る所之或云。這活佛の後小松天皇の御落胤なりをの。自然ありて敢權貴を避け。本真の儘され。朝野の遊び。衆生を濟度し。真盡れ深く執事して坐禪の床に在り。年歳既我臍の歴で教化も倒煩くやありけん。近曾ハ錫と汗。陌小曳とも穿さる。一日其る風の吹たて。獨突然と東山殿を訪なり。ける義政公ハ閑雅を宗と好む。人の至るとふとも屈請志が死。一休和尚の

伺侯者を執びて... 駒く閑室中... 對面... 親戚と
 接洽... 清談... 程... 一休... 坐右... 菊軸... 虎...
 画の頃... 風... 金剛の筆... 亦義政公... 俱...
 了... 原来... 知... 今... 詳... 及... 衛... 酷...
 暴... 洛内... 外... 變... 即... 我... 画... 虎... 来... 歷... 就... 疑...
 思... 初... 巨... 勢... 金... 剛... 画... 時... 倘... 其... 眼... 不... 點... 毫... 毫... 脫...
 胡... 意... 點... 金... 剛... 未... 然... 查... 後... 薛... 何...
 鏤... 鋒... 子... 画... 添... 緊... 這... 虎... 駁... 當... 時... 眼... 不... 點... 毫... 毫... 後... 人...
 筆... 加... 早... 至... 初... 金... 剛... 用... 心... 竟... 其... 甲... 斐... 又... 意... 索...
 初... 這... 菊... 軸... 辰... 巳... 巽... 風... 與... 那... 妖... 麗... 之... 幼... 童... 甚... 者... 云... 他... 其...
 師... 之... 十... 二... 神... 將... 第... 三... 寅... 童... 子... 之... 化... 現... 或... 云... 狐... 狸... 之... 變... 化... 云... 云...

推量... 明證... 若果... 那... 寅... 童... 子... 之... 化... 現... 若... 何... 人... 之... 巽... 風... 這... 靈...
 画... 授... 後... 之... 患... 釀... 倘... 又... 狐... 狸... 之... 所... 為... 樵... 六... 之... 狙... 擊... 時...
 受... 欲... 惑... 惑... 之... 釋... 甚... 麼... 之... 一... 休... 之... 領... 其... 疑... 君... 之...
 世... 俗... 之... 訝... 思... 大... 其... 頭... 世... 妖... 怪... 變... 化... 狐... 狸...
 所... 為... 妖... 然... 之... 人... 之... 冤... 鬼... 之... 妖... 怪... 之... 真... 之... 妖... 怪... 之... 形... 像... 壁... 言... 雨... 雪... 之... 降...
 如... 突... 然... 之... 顯... 滅... 息... 及... 誰... 其... 迹... 見... 鬼... 神...
 二... 氣... 之... 良... 能... 天... 在... 日... 月... 星... 辰... 地... 在... 行... 潦... 河... 海... 七... 十... 二... 候... 二... 十... 四...
 氣... 之... 迭... 代... 則... 天... 地... 之... 變... 化... 抑... 氣... 候... 正... 順... 則... 是... 天... 地... 之... 經...
 不... 順... 天... 地... 之... 變... 其... 不... 順... 方... 五... 穀... 登... 疫... 厲... 流... 是...
 其... 變... 化... 之... 大... 餘... 人... 之... 招... 或... 禎... 祥... 或... 妖... 孽... 之...

あり。あつて外曲の教の中。國家の興亡とまれば。復祥あり。國家將亡亡んとま
 る。妖孽あり。著言龜不見れ四體小動。禍福將至。至んとまれば。善必先之。我
 知る不善必先これを知る。故小至誠の神の如し。といひん我内典云。縁業
 輪回因果。忘報の理り。亦是小相同。在昔宋の徽宗帝の書。とく。画を能
 志。詩文琴棋。雜伎遊藝。巧をまると公とする。只國を治る小拙。あをめて賢
 臣を遠離く。侮人を親愛。刺風流を事とく。各花奇石を言々く集令る
 為。是を千里の外。小求る運送。財竭民傷。其費只億兆のとる。とく。その
 故。外寇。兵屢境を犯して。賊民山東の宋江。亦多くあり。遂小宮中。妖孽起り。
 黒背夜々見る。不及。是は觸る。宮。即死をける者。甚か。竟。國亡る。
 及び。那身の父子。共侶。金。困。拘れて。旅魂。夷狄の鬼と。做。亦悲し。と。ま
 那。黒背の形状。牛。似。最。黒。け。分明。を。ま。く。れ。を見。く。と。今。の。を

瞳の画虎妖も亦那宋の黒背と日と同一とて語るべし。いと憚り小信。と。ま
 拙僧直言仕ら。い。と。よ。御心を推鎮めて。聞。召。君も亦只風流。と。の。年
 束。旨。と。ま。ひ。て。死。貨。と。弄。ひ。の。故。民の父母。る。函政。疎。其。甚。麼。を。
 其の故。応仁の内乱。起りて。官庫の史傳。諸家の舊記。兵火。小隻。字も。残。る。者
 る。故典。傳。を。做。る。もの。君。名物の茶碗。一箇。と。損。ひ。思。ひ。も。做。一。の。猶
 奢。侈。の。弥。増。茶。小。鮎。り。奇。を。好。ま。と。く。珍。器。を。玩。び。の。一。器。の。價。と。同。と。死。の
 萬。錢。萬。錢。も。足。れ。と。せ。遂。先。君。鹿。苑。院。殿。の。頻。卑。小。做。せ。と。這。銀
 閣。を。造。営。あり。る。民の膏。腴。と。絞。り。盡。して。京師。の。野。邊。に。似。され。も。尚。御。心。は。死
 の。事。幸。不。して。當。將軍。の。賢。明。の。事。君。が。驕。樂。小。懲。め。ひ。け。可。い。管。儉
 素。と。事。と。去。て。乱。を。撥。り。殘。る。克。多。く。思。欲。と。と。深。切。る。も。大。乱。久。し。後。る。れ。は。儀
 る。小。力。足。り。あり。て。諸。侯。朝。せ。權。臣。の。尚。恣。や。七。故。の。如。し。并。と。も。君。の。差。五。あり。て。只

茶法ちやほうの故実こじつと正ただして諸侯しよこうの順逆じゆんぎやくと入いれるのことを杜僧そしやう在あることあり。
 後世こうせいも亦また富貴ふきの家豪民けごうみんの子弟しよてい多おほく義尚公ぎしやうこうの賢明けんめいを。儉素けんその御坐ござ也なり。
 其その知しることを。知しれども思おもふことも又また只ただ君きみが頗ひた單たんのこと做しること茶ちやと嗜しむことも嗜しむことも故ゆゑと約やくか
 たた東とう西せいのことを貴たがびて是こゝの東山殿とうざんてんの御物ごぶつ之の彼かの義政公ぎせいこうの御批ごひの形かたちをと喋しゃく
 ろろ其その奇きは誇こほること可た惜あはれず錢せんを費つひせども猶なほ飽あむこと甚たしに至いたりて産さんを破やぶり職しやくを
 喪なげて民たみ叛はんれて困くわん前ぜんられ幸さいひて亡なしるも。訕しやんりと又また後のち貽いはる者もの必かな無なとまさるることを
 蓋け茶ちやの湯ゆの清せい貧ひん困くわん雅やの小集せうしゆ入いれ甲かうまれこまれ有小儘せうたせども是こゝは用もちひてを
 茶人ちやにんの本意ほんいとかへしけれども然しかも高閣かうかく臺榭たいせの美みを盡つくしゆくは化くわ貝かいと弄ろうひて志しを
 失うることを剛雅かうやの真面目まへつめいとかへしけれども廿日じふにちより侍じやくを君きみ這こ驕きやう樂らくとして後のちの指南しゆばんのこと做しること
 ふたたた珍ちん器き奇き石せき花はな并な故書画こしやうゑをよく集しゆ合ごう民たみを傷いたることを尚なほ飽あむこと思おもふこと召めさすと
 既す不ふ年ねん末まつよることとして民たみの怨うらみと鬼神くわんじんの怒いかりの争あうまくふ相あ蘊うんりて那な妖やう孽じやくのこと童どう未み

変かり又又またを腫しゆの画虎ゑうこと見みます世よを箴しんめ人ひとを驚おどろすたりけること尚なほ曉あり得ることなりて。
 反かり又又また那なの童どうの出い出でを誅しゆり且且また虎この眼まなこ不ふ點てんせざらけること用心うしんと詰つりゆめる醉すいの中ちゆうを
 醉すいひて迷まふこと上うへの惑まどひと夫つま以もて一切しやく衆生しゆじやうの眼まなこもよくも瞳ひとこること如ごとく
 あをのり書しよを看みれども文義ぶんぎを悟さとること是こゝを名なづけること文盲ぶんまうと云いふこと甚たしにはなすこと
 て一字いちじ不ふ通つうのことを筆ひつあり是是こゝより下した玉たまと石いしと故ゆゑと來きとを分わ別べつせども視みれども見
 えども指させども知しること是こゝは眼まなこありるが眼まなこの用もちを做しること者もの也なり思おもふこと皆みな目め腫しゆ
 子こら一豈あらまだ一這こ画虎ゑうこのことをいふこと也なり其その故ゆゑは内典ないてんの般若はんにやをのり甚甚た提だいの一義ぎとして
 般はん若にやく即すなはち大智慧だいぢゑいと智ちのことをいふこと也なり知しることをいふこと也なり慧けのことをいふこと也なり即すなはち悟さとることのこと也なり又また外典がいてんのこと
 昏明こんめいの醉すいの醒せいは家か々々と未な見みざること狗子くしの如ごとくいふことも是こゝは君きみの俗しやく云いふ
 物もの數かず奇きをいふこと新あら奇きをいふこと也なり且また珍ちん器き故物こぶつの御ご勘かん定ぢやうの御ご眼がん力りきを富とみあへども
 民たみの真愛まあいのこと見みえるが瞳ひとこること画ゑの虎このことを怪あやしること也なり是こゝは亦また海うみ惑まどひとはなすこと也なり

このひととて、あつと、人の眼、小點せしより、忽地、小鼻、出さる。世の人を、恐嚇せし。此、
 這、無瞳の画虎、人の眼、小點せしより、忽地、小鼻、出さる。世の人を、恐嚇せし。此、
 と、思へ、相似するあり。辟言、本性、奸佞、多し。且、邪智、ある者、或は、亦、庸才、
 るも、救心、漢学、して、眼、其用、を、做、ま、と、心、高慢、り、已、不、慙、く、博、誇、り、俗、を、欺、
 り、利、を、尋ね、名、を、鬻、ぎ、て、反、て、身、を、俗、め、心、を、正、ま、く、家、を、成、し、道、を、修、ま、
 学、問、を、疎、く、只、世、俗、を、非、と、賤、し、め、身、は、是、魔、鬼、界、に、在、る、と、思、つ、甚、し、
 至、り、て、乱、と、起、し、て、刑、せ、れ、衆、と、争、ふ、兵、せ、る、か、の、如、死、白、物、の、惡、名、を、貽、ま、
 如、死、の、瞳、子、る、り、這、虎、の、眼、小、點、し、て、遂、に、那、禍、事、を、惹、出、せ、し、亦、年、と、同、く、
 論、を、嗚、呼、造、化、の、小、兒、の、多、段、玄、妙、禎、祥、も、徒、に、良、き、を、妖、孽、子、も、徒、に、起、ら、
 事、勸、懲、に、係、る、所、誰、か、這、深、意、を、知、ん、や、是、由、を、これ、を、親、れ、は、這、虎、突、
 巨、勢、金、剛、の、肉、筆、も、神、明、佛、陀、の、三、火、画、も、人、も、知、ら、ず、我、も、知、ら、ず、
 眼、を、強、く、説、を、做、し、て、原、故、を、究、ん、と、欲、ま、る、是、惑、ひ、の、益、益、虎、の、猛、惡、も、瞳、

る、けれ、人、を、傷、む、人、の、性、の、美、し、く、ぬ、も、見、ぞ、知、れ、倒、れ、易、く、然、れ、
 反、く、具、眼、の、俗、を、勝、り、て、富、戸、あり、博、識、あり、て、家、を、興、ま、す、
 助、け、人、を、よ、る、べ、君、果、し、て、妖、艶、の、幼、童、の、出、處、と、を、瞳、子、の、虎、の、画、工、の、用、心、を、知、
 多、く、思、召、ま、さ、る、君、が、年、來、の、御、行、状、を、省、め、あ、く、と、疑、ひ、の、小、と、り、と、席、を、
 拍、ち、面、を、犯、し、て、已、心、憚、る、所、を、談、義、數、刻、及、び、一、の、義、政、公、の、悽、然、と、醉、
 如、く、醒、る、が、如、く、且、奴、り、且、羞、る、默、然、と、半、晌、許、孰、と、克、思、へ、智、識、の、教、
 化、至、妙、し、て、是、は、優、劣、を、鍼、砭、す、思、ひ、復、ら、怒、を、盤、す、一、休、し、ち、向、て、感、
 謝、不、堪、る、宏、論、明、辨、老、和、尚、の、あ、ら、せ、り、我、を、よく、諫、め、犯、し、て、か、く、の、如、く、
 言、を、盡、さん、や、是、則、我、が、為、釋、氏、の、比、干、と、覺、し、珎、器、故、物、を、排、斥、け、
 侈、を、省、け、儉、素、と、宗、と、あ、く、の、て、瘦、る、民、を、肥、え、然、る、も、這、無、瞳、虎、の、
 軸、を、の、後、を、在、ら、せ、る、好、事、の、者、又、眼、小、點、し、て、復、禍、を、惹、出、さん、
 八代傳九轉卷之五十一
 五

亦段上ホ
出ま一頁
早九回の
傍像と
佛見る

亦料りかゝる。あやうやうと。と問を。一休笑いけ。君御志を改め。道
稱せぬ。自然と滅却。復た。正可。往方を見
猶御疑ひ。送ま。似。這虎筆下の墨迹。迹。既。是。狀體。形
體。ある者。法を。听。成佛。せ。と。い。て。く。濟度。仕。む。と。答。て。軀。拂。子。成
令。身。と。起。徐。や。ふ。菊。軸。の。虎。打。向。ひ。く。則。偈。を。説。く。道。く。
噫。玉。眼。木。佛。無。學。之。人。視。而。不。讀。讀。而。不。通。勿。笑。無。筆
與。文。盲。水。母。無。眼。蝦。子。技。之。多。目。鰓。鱧。眼。不。為。用。江。湖
億。兆。賢。不。肖。誰。知。無。眼。之。勝。於。有。眼。汝。元。來。是。何。物。也。
筆。下。墨。迹。無。瞳。畫。虎。狡。兒。點。眼。忽。説。世。神。童。射。睛。則。入
絹。妖。乎。怪。乎。神。乎。鬼。乎。一。來。一。去。休。索。出。處。人。面。獸。心。
人。非。入。獸。面。人。心。有。此。虎。造。化。小。兒。多。機。關。以。心。傳。心。

是偈句
不押韻
便是做
翻譯佛
經之例
云

不立文字。寫真寫生。畫亦非也。有像無像。本來空。鼓腹
管心。無一物。苦海愛河。迷孰之深。一盲導衆。盲彼岸遠。
群犬吠於聲。此岸閻中流。風濤不可涉。迷悟在入。豈有
干汝耶。今我採一炬。以為鳥有始。可與人無為也。喝。説
訖。一息。吻。吹。か。れ。其。息。忽。地。心。火。と。做。り。く。虎。の。画。幅。不。移。と。見。え。け
依。那。時。遅。し。這。時。速。し。菊。軸。の。立。地。不。燒。亡。く。軸。さ。へ。あ。ら。む。と。う。義。政。公。へ
吐。嗟。と。む。ろ。小。見。の。敬。馬。の。の。程。一。休。早。く。坐。し。復。り。く。義。政。公。小。稟。を。さ。う。目
今。亦。肉。せ。ぞ。野。林。那。虎。を。教。化。し。て。既。是。為。入。の。誰。う。又。眼。を。點。し。て。世。を
鬧。さ。由。あ。ら。ん。願。の。愚。直。の。諫。言。を。後。々。も。忘。れ。ぬ。で。費。を。少。省。儉。約。を
旨。と。く。民。の。塗。炭。を。憐。れ。ぬ。怪。異。是。より。滅。息。く。鹿。を。走。ら。せ。悔。み。ふ。べ。い。
稟。え。よ。只。是。の。ぞ。做。さ。ぬ。も。做。一。果。つ。身。の。暇。を。あ。ら。べ。い。と。ら。う。軀。を。身。を

起して飄然と退りて。義政公の又その一奇も呆れて一霎時忙然と見送りぬ程に忽地心死す。御後方おゆるる。近臣熊谷俊二郎直次一色駿馬幸通等とて之を若們の思ひに。那一休の隔昨歳文政の冬十一月正一遷化の夢あり。今亦那身あふ来り。我を諫め成まのあり。夢後現歎怪しけれと訝りぬ。直次幸通言語存一稟ま。臣等も亦那和尚の宏論明辨を憶ふに聽聞仕り。隨喜渴仰の思ひを做せる。遷化の夢あり。心も屬く。仰より思へ。實世を去りぬ。今茲に既三稔三余る。近曾樵夫あり。洛外より北山より一休和尚逢ひぬ。と云者のひり。を虚説る。んと思ひ。原來那和尚の今尚死す。在る歟。あらぬ。と答。せむ。義政公の然る。と領。其言思ひ合する。あり。往日。我語次。博士小槻雅久。唐山より仙術を傳ふる者。死する。及びて。實の死。

悄地小松を蟬脱して。深山幽谷に躲きて。人間に還らぬ。是を名づけて。尸解と云。佛者も亦その事あり。達磨の如し。即是。在昔菩提達磨の流支三藏。小毒殺せられ。遷化して三稔の後。魏の宋雲が使を奉り。西域に於ける。歸路に葱嶺あり。達磨の履一隻を携へ。編々として來ぬ。逢ひけり。師の那里に。葱嶺あり。と問へ。西域へ還ると云。且汝が王の既世を厭りと告ぐ。別去りぬ。宋雲本土に還る。及び。明帝の既世を厭る。孝莊位に即後。孝莊達磨の事を。怪と。壙を啓。見る。果。一。那身。在。在。一。一隻の草履あり。と云。その高僧傳及傳燈録。小見え。と。夢。其後達磨。入東。して。權且我邦に在り。聖德太子と贈答の歌。と。片岡山の飢人の達磨の化現。と云。這小説に載て。虎園が元亨釋書。在ると云。是。小由。これ。を。思。一。休。も。亦。尸。解。也。遷化の實。死。せ。り。

この義政
の歌の
後太平記
小載
と大同小
異
見

身みハ猶なほ大おほ山やまハ在あるらるら。京みやこ師しのの心こころをよく知しるる。我われを諫める。惑まよひを解とける。且かつ靈たま画えのの虎とらを焼化やくる。奇きを好む者のの眼まなこを空死あま口くちを鉗める。疑うたひを後のち小ちあらす。せとそののの善ぜん巧こう方ほう便べん願ねがへる。定ます尊し又權けん者の心こころ火をのり。物ものを燔くる。も先ま蹤あとあり。在ある昔釋しやく迦かのの徒と弟てい加か葉えつ佛ぶつのの西さい域いやく二に國こくのの閉せ戦せんを和解わ解げる二國こくのの王わう聽きざりければ加葉えつのの河か上じやうより身を飛べる。雲うんハ騰とりて則すなはち身より火をかてて自みづか焼やく寂を示して每常じやう迅じん速そくのの理ことを論せらる其二に王わう讖せん悔くわいして三王わうを伏せて和わ睦ぼくしる二に國こくのの民たみ幸さいひ命を免れらしと云いふ某甲かう僧そう正せいのの茶ちや會かいのの餘よ談だんをけるを今いま又また思おもひ合しる。裕ゆうと云恰しかと云權けん者の慈じ悲ひを方便べんを量少り省しょうれば我われが年末ねつのの愆とがと悔いければ恚もあらん。汝なんぢのの心こころを直次ちやくと幸通とんを俱小こ額がくを衝つ感服くふして御歌ぎたはまうもらし。御ぎ意いのの趣おもい定小ち當たう文ぶん

事ことハ疎そに臣等しんとうまで御教ぎやう諭ごんふと疑うたひの挾さ霧きりのの風かぜのの拂はらふ如し好学がく問もんを仕てと稱なづ宣のたまふ義政ぎせい公こうを快ける。合あ笑わらみ靈画りやくのの虎とらのの亡なしる。愛あい惜じやくのの念ねんを奉りて大おほ江え親おん兵へい衛ゑい番ばん崎さき十じゆ一いつ郎らう及及び姥おば雪ゆき代だい四し郎らう等らが二河にがのの苜もく子し崎さき小こ歌うた船ふねを折海うみ賊ぞく對たい治ちのの事ことのの顛う末まつのの親おん兵へい衛ゑい並なら照てい文ぶんが伴當たう直ちやく塚づか紀き二に六ろくをもて既小こ懇こんあり且紀き二に六ろく又また主ぬしのの迹あとを慕ひて京みやこ師しへ赴ける。後のちのの事ことハ久ひさし信あらざれば知るよりもる。秋あきも欲盡よくする時候とき獨ひとり延のび崎さき十じゆ一いつ郎らう照てい文ぶんが親兵へい五ご名なと伴當たう夫つま役やく們らを領て歸船きふね安やす房ぶらうのの洲す崎さき小こ着ありて照てい文ぶん則すなはち稻村いなむらのの城しろへ参上まゐりて京みやこ師しのの首くび尾びを切え上り且君きみ侯こう義ぎ小こ拜はい謁てつして宣旨のたまふ御教ぎやう書しよを渡す猶且なほ大おほ江え親おん兵へい衛ゑいのの管くだ領りやう政せい元げん主ぬし小こ抑おさ留どめられる。俱とも小こ還かへるとを告げらる一と告げらる小義ぎ成なり主ぬし



八代傳九轉卷三十一
 氏勅許姓
 就て照文
 賞禄を
 賜ふ大
 共侶の
 侯不拜見
 の処

驚愕にゆき。多くは徑に瀧田へ参りて早く老館へ告げられといをせぬ。照文隨即瀧田へかへり参りて。義実王の告なる。その言異なるべし。親兵衛が口状の事。親兵衛が口書。又七犬士と大母妙真を慰る消息の。時小届外。義実王を首。妙真音音鬼の單節。七犬士も俱小眉を頻單。胸安。かと思ひけり。是より第二日。瀧田の老侯。稻村の城へ來臨。その義。昨日より。その夜。あつた。兩家老東六郎辰相。荒川兵庫助。清澄並杉倉武者。助直元。徳食。准備。堀信乃成孝。犬山道節。忠與。犬川莊助。義任。犬村大角。禮儀。犬田小文吾。悌順。犬飼現八。信道。犬阪毛。野胤。智。大法師。俱小召れ。各公服を救せ。辰牌より伺候。又蛭崎十一郎。照文も召きて。

瀧田の老侯。小従ひ。参りて。己牌時。侯へ参りけり。徳而。兩侯。同席。辰相。清澄。等奉り。則。大と七犬士。召よせけり。登時。義成。主の。一僧。七士。向ひ。今番。願ひ。八犬士。の氏。を金碗。と勅許。且。宿禰。の姓。を賜ひ。を宣示。辰相。則。宣旨。と御教書。啓。聲。朗。朗。讀。聞。且。其。二通。の寫本。大と七犬士。不。遑。與。當。下。七犬士。俱。不。謹。々。拜。聽。一。様。小。席。を。避。け。兩。家。老。辰。相。清。澄。向。ち。向。ひ。欽。び。を。稟。尚。親。兵。衛。か。り。來。傳。今。大。の。席。小。足。ら。ゆ。を。送。憾。を。思。ひ。け。り。開。中。小。大。法。師。の。口。唯。々。の。言。義。成。七。犬。士。と。共。侶。小。遠。侍。へ。退。り。け。り。徳。又。義。成。主。を。蛭。崎。照。文。を。召。よ。せ。く。嚮。小。上。京。の。使。首。尾。宜。く。正。副。兩。役。を。兼。帶。あ。り。遠。け。地。水。路。の。障。り。か。り。來。傳。を。特。小。大。義。小。思。召。と。其。勤。功。を。言。せ。り。時。

服二襲と黄金二十枚を賜りけり。既し時移りおければ、席と更めり。先
 侯の御食饌と羞めゆふ、大召れり。相飯ら又別席あり。照文の酒飯を
 賜ふ則七犬士を相飯せしむ。その折も亦犬士等の親兵衛が一人欠るを
 言ふてお出さひ。各各いと慨しく思ひけり。憊而御食饌果一々、両侯の困室也。
 稍久しく密談あり。其後又照文と七犬士と、大法師と召させぬ、大ら。
 既し退りぬとぞえり。俱し微笑ぬの思系て、口も返させぬ。照文と七犬
 士の軀も亦見参さ。當下両侯の先照文の京師の光景及政元の人と為
 又大江親兵衛が先見遠慮の言の顛末及姥雪代四郎が情願其
 甲斐ありと、苛子崎のゆきも語りせり。听ゆて半响許其言果る。却
 親兵衛を請返せ死便直を七犬士等小問ぬ。道節答る。その是の臣
 等も故ら胸安くしむ。昨日終日額を哀れり。商量仕りけり。承

あはれ樹るに似たり。このいづ備をそなへれば、信乃がゆかり。言あてり。あはれいへども。
 親兵衛の稟する所正仁の上位に在り。誠や孔子の大仁多し。陳蔡は厄
 る死ともゆふ。其侍ゆゆりも。我們七名浮浪六年。百折千磨の艱苦を
 嘗て竟小天日を見る。今の栄あり。獨親兵衛の同く。他は東兄弟の
 抜出り。夙く仕まつる不及び。小厄あり。妙椿狸兎の妖術の中れり。脚疑
 ひを受えり。も幾程るる召復され。素藤對治の全功成り。この一回も
 亦上京の御使を速成り果あり。障りあるか。参らば。その福餘りあり。
 是則天理也。盈ると虧きゆゆり。この莊助も亦ゆかり。臣等傳聞縁
 下く精一の那魯領が台命を伴唱へ。親兵衛を豪擧する。只其
 武勇を譽るの故の。害心あるべし。厄の解る。俟せぬ。あはれいへども。
 孝といふを小文吾うち夢。外任多し。臣等及き。親兵衛が神を奉り。仁

義の外に非如政元主他を最愛とす。則食する大祿をり。係
 まく欲するも他いふや。并を甘らして二君仕る者るらんや。その美と御心
 安らぐべし。と云ふ大角諸のひく。臣もが思意も異なること。昔者前漢の
 蘇武が如た。胡國へ使へり。拘るに十九年。厄解く還るふ及び。麒麟
 閣の功臣。數多入られり。と云故事。さ思ひ比ひ。今の親兵衛の同ら
 る。京師に淹留。兩三月。いふ久し。いふに。信京。其薄義。似れ。鳥
 だも龍中。有友を慕へ。周公且。いふ。と。誰り兄弟の急難。と悲。とん
 心の息。の仲々たるも。よく思へ。時を俟。ふ。と。窮達。時あり。得失。命。縦
 那身を水火の中。置る。とも。親兵衛。の恙。る。あ。靈玉の神護。あり。又。姥
 雪代四郎直塚。紀二六。もの。幫助。る。い。ひ。其。窮。既。蘇武。が。十九。箇。年。の
 似る。べ。く。い。ひ。と。い。は。現。八。その。語。を。継。ぐ。臣。も。只。那。威。勢。を。憚。る。ふ。い。ひ。ね

ども。実。ふ。を。出。し。ぐ。た。意。味。ある。故。右。の。如。し。昨日。衆。議。仕。り。も。大。際。を
 是。れ。過。然。と。も。猶。御。心。許。り。思。召。さ。る。間。謀。見。を。遣。り。て。那。里。の。要。を
 撈。り。あ。御。計。ひ。も。あ。る。は。便。り。を。給。さ。る。外。や。い。は。と。異。口。同。様。小
 議。し。け。り。を。兩。侯。つ。ら。く。ら。夢。の。ひ。と。義。成。主。宣。言。す。現。間。謀。見。の。一。條。の
 那。里。の。吉。凶。を。知。る。捷。徑。あり。徒。は。物。を。思。ふ。より。慰。る。より。も。あ。る。べ。し。但
 毛。野。の。知。日。臺。裏。の。夢。え。あ。る。今。一。言。も。出。さ。ぬ。の。另。外。思。ふ。より。也。あ。は。と。問。さ。る
 毛。野。の。額。を。衝。れ。く。否。臣。も。亦。前。條。の。異。る。べ。く。い。ひ。を。遮。其。間。謀。見
 使。の。一。美。の。便。り。あ。は。し。似。れ。れ。ども。陸。羽。の。処。々。新。関。あり。水。亦。亦。風。傳。の
 障。り。多。し。と。ま。へ。く。を。往。復。坂。東。道。一。里。九。百。里。の。餘。り。の。條。京。師。の。機
 密。を。撈。り。とも。其。使。翼。ある。あ。る。今。日。夢。ゆ。く。明日。告。す。る。術。あり
 づ。も。い。ひ。を。加。旃。事。觸。る。京。家。の。人。の。知。れ。る。い。ひ。親。兵。衛。が。還

るべし路絶ろつてえ。且御みかど為なふ妙たふなるぬるあるべし飲料うりやうりかさる。然しかるを今現いまげん分ぶん
 件けんの一議いちぎ不及あひび。是これ已やこを給たまざるの。他たが本意ほんいゆりゆ。といふを義成よしなり
 うち守まもぬひ。今亦いまいりせんと。問とれて毛野けの又また稟まうせり。他た義よ義よのひ
 比ひ是これ義よ素す藤とうを征伐せいばつの日ひ只ただ寛かんの一字いちじをりて。御方ごほうの士卒しそを損そふとさる。
 全勝ぜんせうを給たまぬひ。賢慮けんりよを仰あやせり。這回このたびも亦また寛かんの一字いちじを。あくとさひ
 へん臣しんも今朝けさも周易しよくの準のりり。親兵衛おんべゑが歸き困くわんの遲速ちそくを。情地じやうぢ考かう
 ひり。不ふ還へんくとも年としの内うちの必かならや信まをわん。姑また且かつ閣かくせんと。七士しちし一致いちじの外がわ
 るらひ。六む側がわ聞きせ。照文てうぶんも理ことのとを稱たえける。その時ときも義実よしざね主ぬしと。黙もく
 然しかと少果せうくわ。義成よしなり主ぬしを。安房あひの殿とのも同意どういなるべし。我親兵衛われおんべゑが還へん
 るを俟まちつと。一日いちにちも千秋ちゆうしゅうの思おもひるれども。見み徹すべるを争い何なにせん。といひ。嗟嘆さたんふ
 堪たぬぬを義成よしなり主ぬしの云い云い。といひ。正首せいしゆの慰なぐさめ。別議べつぎ不及あひぬひけり。

